

大衆社会論再考

——個人主義の思想史に着目して——

東京大学 魚住知広

1. 目的

本報告の目的は、大衆社会論の意義と特徴をその背景にある思想史との関係を踏まえて検討することである。大衆社会論は第二次世界大戦前後に隆盛を誇ったが、全体主義の脅威という時代性が強い議論であったこともあり今日参照されることは多くない。しかし、そこで論じられていた主題は、アメリカの社会思想史で繰り返し登場する個人主義をめぐる思想史的伝統と一定の関係性を持つものであることを示す。

2. 方法

大衆社会論を対象とした学説研究である Kornhauser (1959=1961) などを参照しながら、デイヴィッド・リースマンなどの大衆社会論が個人主義論の思想史とどのように関係しているか検討する。特に、Elliott and Lemert (2005) で指摘される "Isolated Individualism" (孤立した個人主義) の思想的伝統に着目する。

3. 結果

大衆社会論の議論で扱われる主題は、社会の原子化であり中間集団の衰退が問題視される。コミュニティや中間集団の衰退は、リンド夫妻のミドルタウン研究などもあり当時広く共有されていた社会認識であった。活動的な中間集団への着目は、それをアメリカの民主主義を支える基盤とみなしたアレクシス・ド・トクヴィルの思想に由来している。この個人主義という主題はしばしばトクヴィルを媒介に論じられ、個人主義的な価値観が浸透して中間集団が衰退する中で民主主義の風土をいかに保つのかという問題系は (Bellah et al. 1985=1991) や (Putnam 2000=2006) にも引き継がれている。

4. 結論

大衆社会論は全体主義の脅威という時代性に強く影響された議論であるが、そこで論じられる主題自体は形を変えてその後も度々問題とされている。また、大衆社会論の特徴を個人主義論の思想史との関係から見た場合、精神分析の知見が積極的に取り入れられていた点を挙げることができる。性格次元への着目は、市民的徳を重視する市民社会論とも親和的である。

文献

Bellah, Robert N., William M.Sullivan, Richard Madsen, Ann Swidler, and Steven M.Tipton, 1985, Habits of the Heart: Individualism and Commitment in American Life, Berkeley: University of California Press. (= 1991, 島蘭進・中村圭一訳『心の習慣——アメリカ個人主義の行方』みすず書房.)

Elliott, Anthony, and Charles Lemert, 2005, The New Individualism: The Emotional Costs of Globalization, London: Routledge. Kornhauser, William, 1959, The Politics of Mass Society, Glencoe: The Free Press. (= 1961, 辻村明訳『大衆社会の政治』東京創元社.)

Putnam, Robert, 2000, Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community, New York: Simon & Schuster. (= 2006, 柴内康文訳『孤独なボウリング』柏書房.)